

院長就任式

2007年 5月11日 新マーガレット・クレイグ記念講堂にて

「神への感謝 仕える喜び」

東洋英和女学院理事長・院長 池田守男

召命しょうめいに導かれ感謝に生きる

神に感謝いたしております。またご出席いただきました皆様方、日頃から皆様方のご支援によりまして、私は今日まで生かされているのではないかということ強く感じさせられておりました。また先程は、中高部クワイアによる「アレルヤ」を万感の思いで一緒に聞かせていただきました。ヘンデルのメサイアにおいてもそうですが、ハレルヤというのはご承知のように「イエス・キリスト誕生」がハレルヤではございません。「十字架」がハレルヤでございます。そういう思いで聴かせていただいております折に、私はひとつの聖句を思い起こしました。その聖句は「一粒の麦 地に落ちて死なば一粒に過ぎず。されどその麦 地に落ちて死なば多くの実を結ぶなり」という言葉でございます。私自身この一粒の麦の如く、全身全霊をもって皆様のお支えの中で、この東洋英和の院長という役割を果たさせていただきたい、そういう思いをもって神に感謝をさせていただいていたところでございます。感謝以外の言葉はございません。

東洋英和女学院の理事長に2年ほど前に就任させていただきまして、この度は新たに院長という役割をいただいたわけであります。申すまでもなくそのような器ではございません。私自身を小さな土の器ではないかというふうに常に思っている者でございます。しかしながらこの使命をいただきました時に、牧師を目指しておりました私の若き日の志と、企業人・経済人として経験しました多くのものを院長という立場で教育の現場において少しでも役立たせよという、そういう神の声を私は祈りの中で聞かせていただいたという気がしてならなかったのであります。このことは私にとりましては、神からの「召命しょうめい」であり「Calling」ではないかというふうに思うわけでございます。先程も申しましたように小さな土の器でございます。院長に価する者ではございません。しかしながらこれまで常に大きい役割をいただきます時には何かそのような「召命しょうめい」「Calling」というものを感じさせていただくことによりまして前に進んで来た、そういう経験が大変多くあったわけでございます。これらのことを考えますと、小さな器であるからこそ、足りない部分を神が補ってくださる、足りない部分があるからこそ多くの方々の支えの中で新しい役割を担うことが出来るのではないかと、そういったことを常に感じてまいりました。足りない者が大きな役割をいただくということは、そのような機会をいただいたという感謝の念以外の何ものでもございません。その感謝の念をもって、多くの皆様のご協力を得て、その役割を遂行させてきたのが、今日までの私自身でございます。

与える喜びが満ち溢れるように

経営の立場にありまして常にもサーバントに徹することを自分自身にも言い聞かせ、組織の中でも全てが社会に向かって、お客様に向かってサーバントに徹すべきである、「サーバントリーダーシップ」を発揮すべきである、ということをお願いしてまいりました。この世の中にありまして、私はこれからの時代、サーバントに徹する、そのことによる喜びが社会全体を大きく発展させる原動力になるのではないかと強く感じさせられております。聖書に「与えるは受けるよりも幸いなり」という言葉がございます。与える喜びは受ける喜びよりもいかに大きいかということを感じつつ、私自身も小さな器でありながら、今日までサーバントに徹するよう努力してまいりました。私どもの東洋英和がこの与える喜び、「奉仕」の精神に満ち溢れた学院であってほしいと願っております。その院長となる私が先頭を切りまして、教職員の皆様とともに努力をさせていただきたいと思っております。ヨハネによる福音書13章では弟子の足を洗うイエスの姿が記されております。イエスは自らを低くされ、弟子の足を洗うという行為で、本当の「奉仕」の気持ちをわれわれに示しておられます。この「奉仕」の精神が先程申しましたように学院のみならず、社会全体に満ち溢れることを期待してやまないわけでございます。そのために教育の現場の責任者といたしまして、また企業に携わる者といたしまして努力をさせていただきたい。それには多くの関係者の皆様のお支えなくして出来ないわけでありまして、ご一緒に臨ませていただきたいわけでありまして。

よき伝統に新しい木を接ぐ

21世紀を迎えまして新しい社会秩序が模索されております。その中にありまして今日ほど教育の重要性が問われている時はないと感じております。私自身政府の教育再生会議の委員の一人としまして今朝ほども会議がございましたが、ますますその責任の重大さを痛感しております。

教育には理念が必要であります。私にとりまして人間形成の柱とさせていただいておりますのは新渡戸稲造先生の人間性であり、人格形成の理念であります。「武士道」その他の著作によりまして多くを学ばせていただきました。神への愛、隣人愛、そして生きとし生けるもの、地上に存在する全てのものへの愛と尊敬の念。また目に見えるものより目に見えないものを尊重するような精神。多様な価値観、知識を積極的に受け入れ、それらを融合し新しいものを生み出し、その生み出したものをもって社会のために奉仕していく精神。私はこれこそが教育の原点であり基本であるというように思っています。しかしながら今日の社会状況、特に家庭や地域社会を見ておりますと、あらゆるコミュニティの中でそれぞれの関係性といったものが希薄化しております。そういったことを考えますと今の社会の中で最も欠落いたしておりますのは、先程申しました理念であるように思います。そうであるならば何としてもこれらの精神を今日の社会の中に根付かせたい、定着させたい、そういう思いで一杯であります。

東洋英和ではご承知のように「敬神奉仕」の精神に基づきまして、様々な社会的事業を行ってきた歴史がございます。そのことは知識の習得のみならず、人格教育に力を入れているということがございます。ひとつの例といたしまして永坂孤女院や恵風女学校のような救済事業、社会事業の一端を心懸けるような教育が伝統的に培われてまいりました。ですから、私が『武士道』から学ばせていただいた「接ぎ木」の考え方にのっとりまして、東洋英和のよき「敬神奉仕」の精神・伝統を「接ぎ木」の台木にいたしまして、その上に新しい時代に向かっての教育概念といったものを接ぎ木し、新しい時代に向かって東洋英和のみならず日本の教育そのものが新しく再生することを願ってやまないのでございます。

共に喜び共に泣き、歩み続ける

北原白秋が作詞しております東洋英和の校歌がございます。ご存知とは思いますが、「神を思ふ清らけきもの 人をつかふ度ましきもの」という「敬神奉仕」の精神が校歌の中で詠われてございます。この校歌にあるような人物を育てていきたいのであります。そして私ども一人ひとりが喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣く、そういう人でありたいというふうに願い、私自身も皆様とともに努力をさせていただければ幸いです。冒頭にお約束させていただきましたように全力を尽くして、一粒の麦の如く、その役割を果たさせていただきたいと思っております。どうか皆様のあたたかいご支援とご協力をお願い申し上げます、私の院長就任の挨拶にかえさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。